

令和7年度 全国学力・学習状況調査結果の概要

伊 那 市 教 育 委 員 会

1 調査の目的（文部科学省）

- ・義務教育の機会均等とその水準の維持向上の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図る。
- ・学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。
- ・そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2 令和7年度調査実施日 4月17日(木) 中学校理科は調査基準日の3日前～調査基準日までの4日間で分散してCBTで実施。

3 調査対象 小学校第6学年、中学校第3学年

4 調査内容

(1) 教科に関する調査

- ・小学校：国語 算数 理科
- ・中学校：国語 数学 理科

(2) 質問紙調査

- ・児童生徒に対する質問紙調査
- ・学校に対する質問紙調査

5 結果の概要と改善のポイント

(1) 小学校

① 国語

平均正答率は全国平均に比して若干上回っている。上位層の割合がやや少ないため、児童が持つ力をさらに伸ばせるような取組も積極的に取り入れていく授業を工夫したい。設問の最後にある記述式の問題は、無回答の児童も一定数いるものの、回答している児童の多くが問題を読み取って正しく記述する力をつけてきている。長文を限られた時間の中で読解していく力をさらに伸ばすために、まずは、短い文章を読んで自分の考えを指定字数内で既習漢字を用いて書いたり、図や表などの資料を示しながら相手に伝わるように文章を書いたりする学習を、国語をはじめ各教科の授業の中で日常的に取り入れていくことを全小学校で大切したい。

② 算数

平均正答率は、全国と比して若干下回っている。上位層の割合が全国と比べて低いものの経年変化では全国と比べ下位層の割合が低くなってきており、改善に向けた取り組みの成果が伺える。課題が見られた問題では、数と計算、変化と関係の領域における基本問題、特に数直線上に示された数を分数で書く問題の理解に課題が見られた。数直線は中学校で負の数や有理数、無理数を理解し、数の世界を広げることに必要になるため、どの学年においても算数の授業場面で数直線や線分図を用いて問題を解決したり、理解を深めたりすることが有効な手立てであることを児童自身が納得感を持って理解できるように授業を工夫していきたい。

③ 理科

平均正答率は、全国に比して若干下回っているが、その差は小さい。知識および技能よりも、思考・判断・表現等に関する問題への正答率が高い傾向にあり、実験・観察を行い、試行錯誤しながら順を追って考察したり、予想と異なる結果が出たときにそれはなぜかを考えたりする経験を数多く積んできた成果がうかがえる。一方、知識および技能に関する

問題の正答率がやや低いことや、科学的に正確な表現をすることが苦手な傾向がうかがえる。充実した実験・観察を行っているという強みはそのままに、考察等の段階で、児童が互いの結果や考察等を比較検討し、対話を通してより科学的に妥当な考察へと高めていく機会を設定していくことに取り組んでいきたい。

(2) 中学校

① 国語

平均正答率は、ほぼ全国平均レベルである。出題形式や観点、領域などの傾向では、全国と比べて特に大きな違いは見られない。記述式の問題や「読むこと」の問題の正答率が向上しており、これまでの学習の積み重ねの効果が認められる。正答率の低い問題に着目すると、「同音異義語の熟語」や「使用の紛らわしい漢字」への理解に不十分さ見られるため、これらについても自分なりの方法で情報を集め、整理分析して表現するなどの探究的な学習をすすめていきたい。物語文の構成についての理解に課題がある。作者がその一文をそこに置いた意図やその効果を友と共に検討し合うなどの協働的な学びを取り入れながら分析的に物語文を捉える見方を養う授業を展開していきたい。

② 数学

平均正答率は全国平均を下回っている。特に「数と計算」領域で課題が顕著であり、上位層の力が十分に発揮されていない傾向がある。問題別にみると、中1内容の「素数」や「相対度数」といった基礎的知識の正答率が低く、学習後に繰り返し触れる機会が少ない内容の定着不足が見られる。また、式の意味を活用して説明する記述式問題でも正答率が低く、思考・判断・表現等の力に課題が見られた。今回の調査で正答率の低かった基礎的な問題については、復習や補充を徹底することが求められる。さらに体系的に学習内容を振り返る機会を設け、知識および技能の再確認とともに、それらを活用して説明する力を育てる授業を計画したい。A Iドリルや復習プリントなどを工夫して取り入れることで、基礎の定着と応用力の強化につなげていきたい。

③ 理科

平均 IRT スコアは全国平均を上回っている。学力のばらつきを示す標準偏差を見ると、伊那市は全国よりも小さい値であることから、集団の全体のばらつきが小さく、平均的な学力の生徒が多いと言える。特に、伊那市の中間層の割合は、全国と比べて顕著に高い割合であるものの、学力上位層の割合は、全国平均をやや下回っており、学力が高い生徒をさらに伸ばしていくことが今後の課題と言える。記述の問題の正答率が高く、日常の授業において「実験の目的の確認」「仮説から検証の方法を確認」「結果の見通しを持つ」「結果から考えられる考察」などを丁寧に検討する授業を心掛けている成果と考えられる。さらに、与えられた条件を整理して、科学的に正確な記述ができるよう指導していきたい。

6 児童生徒質問紙調査から

伊那市の子どもたちは、全国と比較して生活習慣の安定、読書意欲の高さ、ICT活用の積極性、人との関係性の豊かさが高い傾向にある。地域と家庭の教育力が日常生活の中にしっかりと根づいており、「人とのつながりを大切にする」ことが教育の基盤となっていることがうかがえる。

「朝食を毎日食べていますか」では、小中学生共に全国平均を上回り、「学校は楽しいですか」では小学生の約9割が肯定的に回答し、安心して通える学校づくりが実現していることがうかがえる。また、「読書は好きですか」という質問では、小中学生共に全国平均を大きく上回った。読書時間30分以上の児童も多く、地域ぐるみで読書を支える雰囲気を整えていることがわかり、このよさを思考力や表現力の育成に生かし、今後の授業改善につなげていきたい。

「授業でタブレットやパソコンを使いますか」という項目では、小中学生共に「よく使う」が、全国平均を大きく上回った。このことから教員の活用意識も高いこともうかがえる。今後は、ICT環境の整備だけでなく、「情報を整理する」「文章を書く」などの活動を大切に

しながら、探求的な学習の道具としてのＩＣＴ機器利活用の充実を図っていきたい。

一方で、「わからないことを先生に質問しますか」「友達に相談できますか」という項目では、中学生の一部に消極的傾向が見られ、中学生期特有の不安や孤立を和らげ、安心して気持ちを伝える場が必要となる。子どもたちが自分の思いや悩みを言葉にできる環境づくりを今後さらに継続していきたい。

伊那市の子どもたちはこれらのことから、①家庭・地域との協働による学習習慣づくり、②読書を核とした言語力・表現力の育成、③ＩＣＴを活かした探究的学びの深化、④安心して話せる人間関係づくり、を重点に取り組むことを大切にしていきたい。確かな生活力と豊かな感性を備え、未来を自ら切り拓く力を育みつつ、「人を思い、学びに向かう子どもたち」を学校と地域が連携して支えていきたい。

7 今後の取組

各学校において本年度の全国学力・学習状況調査の分析に基づいた授業改善及び学力向上の方策を明確にして具体的な実践を進める。調査対象学年のみの特長や課題としてとらえるのではなく全学年で取り組むことが重要である。また、低位層児童生徒に対する基礎的・基本的な内容の学び直しやていねいな個別指導による学力の定着を図ると同時に、上位・中間層児童生徒に対するさらなる学力向上の取組を構築したい。課題は各学校によって異なるため、学び直しの内容や個別指導の方法は実態に即したものでなければならない。

ＩＣＴ機器の効果的な利活用についてもさらに研究と実践の検証を進め、個別最適な学びと協働的な学びを一体的に授業において推進していく。一方で家庭学習のあり方についても近年、研究が進んできている。作業的な事柄や内容に時間を費やす従前のものから、自ら課題を考え、興味関心のある学習内容の追究を深めたり、苦手だったり、理解が不十分な内容に取り組んだりする家庭学習に改善されつつある。児童生徒への支援、指導を積み重ねたい。